シューマンの「子どものための作品」に関する研究
―《子どものための歌のアルバム》Op.79を中心に―

多　田　愉　可*

A Study of Robert Schumann's Works for Children
－With a focus on *Liederalbum für die Jugend* Op.79－

Yuka Tada

German romantic composer, Robert Schumann (1810-1856), composed works in a variety of areas during his life, but he notably wrote many pieces that included "für die Jugend" (for children) in the title, particularly in his later life. A musical and cultural movement during Schumann's period of greatest activity in 19th century Germany was the practice of families and friends enjoying music at home. This was embodied in the concept of *Hausmusik* ("music played in the home"), which was spreading throughout Germany at the time. With the appearances of educational thinkers such as Pestalozzi and Fröbel, new public education systems for children were being considered, and songs for children were written one after the other against the backdrop of the uniquely German *Hausmusik* environment. When the May Revolution broke out in Dresden in 1849, the Schumann family fled the fighting and moved temporarily to Kreischa, where Schumann composed *Liederalbum für die Jugend* Op.79, *Jagdlieder* Op.137, and the *Motet* Op.93. The political interest of the republican Schumann undoubtedly lurked within his creative motivation for these works. It is also easy to surmise that Schumann lived in a time in which he was exposed to diverse literary currents, and he was stimulated to write lieder (songs) while being influenced by the outstanding poets who were his contemporaries. This paper focuses on *Liederalbum für die Jugend* Op.79, and investigates Schumann's intentions behind including "für die Jugend" in the title, while clarifying its features through analyses of the lyrics and music.

キーワード
ロバート・シューマン Robert Schumann,《子どものための歌のアルバム Lieder für die Jugend》Op.79,《子どものためのアルバム Album für die Jugend》Op.68,『音楽にかかわる家庭と生活の規範 Musikalische Haus-und Lebensregeln』，子ども観 The View of Children

所属
*広島文化学園大学院 Graduate School of Hiroshima Bunnka Gakuen University
教育学研究科 Graduate School of Education　子ども学専攻 Cource of Child Education

はじめに

ドイツ・ロマン主義音楽の作曲家ロバート・シューマン Robert Schumann（1810－1856）は，生涯にわたって多領域の作品を創作したが，とりわけ人生の後半期において，「子どものため」と冠する作品を数多く残したことは注目される。彼の妻クララのために書いたとされる《子どもの情景》を除外しても，ピアノ曲《子どものためのアルバム》Op.68（1848）を初めとして，《子どものための歌のアルバム》Op.79（1849），《小さな子どもと大きな子どものための12の連弾曲集》Op.85（1849），《子どもの舞踏会》Op.130（1853），《少年のための３つのピアノ・

ソナタ》Op.118（1853）など，一つのジャンルを形成するほどである。創作動機については，1841年から晩年にかけて８人の子宝に恵まれたこと（第５子は誕生の翌年死亡）が大きな要因になったとする一般的な説があるが[1]，前回《子どものためのアルバム》Op.68を通して考察したように[2]，19世紀のドイツを中心とする「家庭音楽 Hausmusik」という文化的・社会的背景や，当時浸透しつつあったフレーベルらを中心とする子どもに関する教育思想もシューマンに少なからぬ影響を与えたものと思われる。

今回は《子どものためのアルバム》Op.68の翌年に出版された《子どもための歌のアルバム》Op.79に焦点を合わせ，詩や音楽の分析を通して曲集の特徴を明らかにすると同時に，シューマンがあえて作品のタイトルに「子どものため」と記した意図を究明することを目的としたい。

人生後半期のシューマンについては，一般的に精神疾患による影響が大きく取り上げられるが[3]，当時の音楽評論家でもあり，シューマンの友人でもあったE. クリッチュは，『音楽新報』の中でこの曲集について次のように評している。「表面的なことや技術的な事柄に限らず内容面での強化が図られている。作曲者は若者の成長のデリケートな糸を，魂が長い眠りから目を覚まし，より生き生きと活動し始めるところまで思慮深く操っている。」[4]

Ⅰ　シューマンの歌曲の概観

R. シューマンは1830年頃から1839年にいたるまでの間，多くのピアノ曲を手掛け，《パピヨン》《クライスレリアーナ》，《謝肉祭》，《ダヴィッド同盟舞曲集》，《幻想小曲集》，《交響的練習曲》，《ピアノソナタ》他，傑作の数々をたて続けに作曲した。1840年，クララとの結婚を契機に，彼の創作活動は一時ピアノ曲を離れ，歌曲や管弦楽曲，室内楽等に移る。とくに1840年はシューマン自らが「歌曲の年」と名付けており[5]，この年だけで200曲近い歌曲を書いている。ハイネの詩による《リーダークライス》op.24，《詩人の恋》op.48，アイヒェンドルフによる《リーダークライス》op.39，シャミッソーによる《女の愛と生涯》op.42，そのほかリュッケルト，バイロン，バーンズ，ゲーテ等のロマン派の詩に基づく作品はすべてこの年に書かれている。「リュッケルトとアイヒェンドルフは，それ以前から名高い詩人だったが，だんだん音楽家たちと馴染みが深まってきた。ことにウーラントとハイネは，最も好んで作曲された。こうして昔の人々に全く知られなかった一層芸術性の豊かな，一層意味の深いリートが発生した。」[6] とシューマン自身が述べているように，シューマンは多彩な文学的潮流の中に生き，優れた詩人たちの作品から影響を受けつつ，歌曲創作の意欲をかりたてられたことは容易に推測される。さらに，「ベートーヴェン以来，真に重要な進歩を遂げたものは，おそらく歌曲のみであろう。」[7] とさえ自負するほどである。

また，1840年「歌曲の年」における時期こそがシューマンの創作の絶頂期であり，後に「そのレヴェルを超えることも，近づくこともなかった。」[8] というのがシューマン研究者 E. サムスの見解である。それに反して，1849年に作曲された《子どものための歌のアルバム》Op.79を「芸術的後退ではなく，むしろ新たな発展的スタイルによるシューマンの円熟した表現法をみることができる」[9] と主張するのは同じくシューマン研究者の J. W. フィンソンである。《子どものための歌のアルバム》Op.79が単なる子どものための易しい作品ではなく，フィンソンの主張する円熟期における芸術性の高い作品であるならば，シューマンが子どもの世界を表現するために「歌曲の年」とは異なるスタイルでこの作品を完成させたと仮定できる。シューマン自身が子どものために選択した詩や，「簡単なものから複雑なものへ」と推移する難易度の設定や，シンプルでありながら表情豊かな旋律，それに合わせて工夫されたピアノ伴奏の中に，シューマンの子どものための配慮を見つけたい。

Ⅱ　《子どものための歌のアルバム》Op.79の成立とその背景

シューマンが活躍した19世紀ドイツの音楽的・文化的運動として，家族や仲間たちと音楽を楽しむ習慣があり，「家庭音楽」という概念が広く浸透していた。W. ザルメンは彼の著書『人間と音楽の歴史』の中で，19世紀初頭のドイツでは売行きと出版効果のみを考えた音楽作品の出版と編集の活動が極めて活発であったと述べている[10]。それによって莫大な数の人気メドレー集が出版されるようになり，幅広い音楽

愛好家層は多様な楽譜を安価で容易に買えるようになった。逆に悪趣味な編曲がはびこることを懸念したH. G. ネーゲリ（1773－1836）は1810年に《歌唱法教本 Gesangsbildungslehre》を発行している。それは歌唱の教育を振興するためのものではなく，〈家庭内の高貴な喜び〉を洗練させることを目的として編集されたものであった[11]。教会音楽が，信仰の如何を問わず，家庭音楽として復活した経緯をザルメンは指摘する[12]。家庭的なサークルの一つ〈歌の小サークル〉が発展し，19世紀初頭には楽友協会やリーダーターフェルが生まれる。その一方で，聖歌隊や礼拝堂楽団の解散など，いわゆる教会音楽が衰退し，教養ある市民階級が声楽曲の維持を私的に受け継ぐ時代へと移行しつつあった。このような情勢を背景に，子どもを対象とした独唱歌曲の作品集として，W. タウベルトの《子どもの世界の響き Klange aus der Kinderwelt》[13] やドイツにおける幼稚園の創始者として知られるフレーベルの《母の歌と愛撫の歌 Mutter-und Kose-Lieder》[14] が共に1844年に発表されたことも興味深い。

フレーベルの歌曲集が出版された５年後の1849年に，シューマンは《子どものための歌のアルバム》Op.79を完成させ出版した。この時期は，ドイツ革命と言われる市民運動が各地で勃発したことで知られている。特にこの作品を手掛けた1849年はドレスデンで五月蜂起が勃発し，シューマン家は戦火を逃れ，ドレスデンから一時的にクライシャへ移住していた。そこで《子どものための歌のアルバム》Op.79のほか，《狩りの歌》Op.137，《モテット》Op.93を次々と作曲するが，後に見るように，共和主義者シューマンにとって，政治的関心がこれらの作品に潜む創作動機となったことは否定できない。

「歌曲の年」から10年近くを経た1849年は，シューマンにとってきわめて実りの多い年とされている。家族についても，「ルートヴィッヒ（この年に誕生した第５子）は素晴らしく発育して我々を喜ばせる。」「マリエ（1841年誕生の第１子）の耳は音楽的に正確になってきた。彼女が小さな歌をうたうとき，私にはそれがわかる。」[15] と子どもたちの育成ぶりを喜んで回想録に記している。

この時期のシューマンの動向を知るには，シューマンが1837年から亡くなる1856年まで書き記した日記帳（Haushaltbücher）[16] が参考になる。これには支出の項目に加え，当時の生活状況を窺わせるメモが断片的に記されている。この中の1849年の記録から，子どものための歌曲集に関わりが深いと思われるメモを拾い出してみると次の〈表１〉の通りである。なお，出典欄の Sams や Gebhardt は，参考文献からの引用であり，（F）は Finson に重複して見られるものである。

〈表１〉シューマンの「日記帳」から

日付	メモ	出典
4/21	3 kinderlieder-Probe des spanischen Liederspiels	Tagesbücher(F)
4/22	Einige Kinderlieder	Tagesbücher(F)
4/23	3 kinderlieder	Tagesbücher(F)
4/26	Kinderlieder	Tagesbücher(F)
4/27	2 Kinderlieder	Tagesbücher(F)
4/28	Nachmitags des Liederspiels	Tagesbücher
4/29	Liederspiel	Tagesbücher
	Er ist's	E. Smas[17]
4/30	Kinderlieder	Tagesbücher(F)
5/2	Kinderlieder	Tagesbücher(F)
5/3	Kinderlieder Schüzenlied, Senenlied Revolution	Tagesbücher Gebhardt[18]
5/4	Revolution	Tagesbücher
5/5	Revolution Hr. v. Globig へ	Tagesbücher
	2 stimiges Frühlingslied	Tagesbücher(F)
5/7	zurück (Dresden)	Tagesbücher
5/8	Die wandelnde Glocke später hinzugefügt	Tagesbücher(F)
5/10	Revolution	Tagesbücher
5/11	Familie nach Kreischa	Tagesbücher
5/12	2 Mignon	Tagesbücher(F)
5/13	Sontag Fallersleben componiert	Tagesbücher(F)
	Song Album for the Young completed.	E. Smas，(F)
5/14	Abends nach Saida	Tagesbücher
5/17	Bei Cantor Schurig die Jugendlieder durchgegangen	Tagesbücher
5/18	2 jagdlieder	Tagesbücher
5/21	Letstes Lied der jagdlieder comp.	Tagesbücher
5/25	Mit Klara nach Saida	Tagesbücher
5/31	Rückert's Gedichte. 3Thaler	Tagesbücher
6/1	3 Lieder von Rückert	Tagesbücher

6/8	Mein 39ster Geburtstag	Tagesbücher
6/20	Mignon	Tagesbücher
6/21	4stes Lied d. Mignon	Tagesbücher
6/22	Fruh bei Prof. L. Richter	Tagesbücher
6/23	Lynceus'Lied	Tagesbücher(F)
6/24	Nach Kreischa	Tagesbücher
6/27	Liederalbum	Tagesbücher

《子どものための歌のアルバム》Op.79は，1849年の４月21日から５月13日の間にドレスデンとクライシャで作曲されたとされている[19]。この日記帳の記録によると，《子どものための歌のアルバム》Op.79の創作へ向けてシューマンの創作意欲が高まったのは，少なくとも1849年の４月から６月頃の間（〈表１〉参照）で，革命の混乱を避けてドレスデンと近郊のクライシャ等を行き来していたことがわかる。５月３日，４日，10日には生々しく「革命」の文字が記され，シューマンはまさに革命の嵐の渦中にいたことが明らかである。メモ書きは「２つの子どもの歌」のようにきわめて簡略化して書かれており，詩集を購入したのか，作曲したのか，予定を記したのか，これだけでは判断が難しい。中には５月13日に「ファラースレーベンの〈日曜日〉を作曲」のように具体的に書かれている場合もある。サムスによれば，《子どものための歌曲集》はこの13日に完成したことになる。しかし，その後もリュッケルトの詩を３ターラーで購入したり，「リュンコイスの歌曲」と記す一方で，出版社ヘルテルとの交渉が見られることから，しばらくはこの曲集の出版構想に専念していたと思われる。

U. マーレルトによれば，初版は1849年11月，ヘルテル社から出版された[20]。それに際して曲集のタイトルを《子どものための歌曲集 Lieder für die Jugend》とするか，それにアルバムを挿入して《子どものための歌のアルバム Liederalbum für die Jugend》にするか悩んだ末，結局表紙には後者を，中扉に前者を採用した。シューマンは出版社との交渉の中で，イラストはL. リヒターに依頼すること，それも人物像は最小限に止めてできるだけシンプルにすること，楽譜の各頁には親しみがもてるように飾り枠を設けてエレガントにしてほしい旨，要望を出している[21]。４月21日の「３つの子どもの歌」に始まり，子どもの歌に関する記述が続いており，６月22日の朝にはシューマンが直接リヒターを訪ねている。このように1849年の前半に日記帳に記された記録から，シューマンが「子どものため」と題する歌曲集に取り組むプロセスがはっきりと窺える。

Ⅲ　《子どものための歌のアルバム》Op.79の詩

《子どものための歌のアルバム》Op.79に用いられた詩は，11人の詩人による26編の詩とドイツ民謡集『少年の魔法の角笛 Des Knaben Wunderhorn』から３編の詩が採用されている。シューマンが批評家 E. クリッチュへの手紙の中で「子どもにふさわしい最良の詩人の手になる詩を選び，簡単な歌から難しい歌へと順に進んでいくように努めた」[22]と述べているように，この曲集に収められた29の詩は，文学の巨匠による芸術性の高い作品集となっている。ゲーテ，シラー，アンデルセン，メーリケ，ウーラントらに加え，ファラースレーベンの詩が10曲も含まれていることは特に注目に値する。作詞者による内訳は，次の〈表２〉の通りである。

〈表２〉Op.79における作詞者と曲数

詩人	曲番	曲数	春に関わる詩
ファラースレーベン	1，2，3，4，5，6，12，15，19，20	10曲	6曲
ウーラント	9	1曲	
オーヴァーベック	10	1曲	1曲
クレクト	13	1曲	
ヘッベル	16	1曲	
メーリケ	24	1曲	1曲
アンデルセン	17	1曲	
ガイベル	7，8	2曲（1組）	
リュッケルト	27	1曲	1曲
シラー	23，26	2曲	
ゲーテ	28，29	2曲	
『少年の魔法の角笛』	11，14，21	3曲	

いずれの詩人も18世紀後半から19世紀にかけて活躍したドイツの詩人で，『少年の魔法の角笛』はドイツ民謡を蒐集して作成された詩集である。

シューマンは「政治的開放こそが詩の乳母となるだろう。詩的開花を広めることは全てにお

いて必要である。正真正銘の詩は農奴制や奴隷制のはびこる国においては栄えることはない。」と日記に綴っている[23]。それを裏付けるように，この《子どもの歌のアルバム》はファラスレーベンの詩で始まり，それに続く6曲と第12，15，19，20曲の合計10曲にシューマンはファラースレーベンの詩を選んでいる（〈表2〉および〈表4〉参照）。

ファラースレーベン Hoffmann von Fallersleben（1798－1874）は『ドイツ，世界に冠たるドイツ』の作者として知られ，19世紀半ばに西から中央ヨーロッパにかけて各地で起こった革命の嵐において，共和主義運動の強力な支持者であった[24]。彼は子どものための詩や歌にも愛着を示し，当時の音楽教育者，作曲家であったE. リヒター E. Richter（1805－1876）の協力を得て，ピアノ伴奏付の《子どものための50の歌》，《子どものための新しい50の歌》，《子どものための40の歌》など，数多くの子どものための歌を残しており，それらは今日でもドイツの子どもたちに愛唱されている。次にファラースレーベンの代表作〈春の訪れ〉（第20曲）を取り上げてみる。

〈Frühlings Ankunft　春の訪れ〉
（喜多尾道冬訳）[25]

Nach diesen trüben Tagen,
Wie ist so hell das Feld !
Zerrißne Wolken tragen
Die Trauer aus der Welt.
陰鬱な日々が過ぎ去って
外はなんて明るくなったことでしょう！
雲がだんだん消えていき
あたりから寂しさを追い払ってくれる

Und Keim und Knospe mühet
Sich an das Licht hervor,
Und manche Blume blühet
Zum Himmel still empor.
そして木の芽や花の蕾が
光を求めておずおずと顔を出す
そして花々が咲き始め
天に向かって静かに花開いている

Ja, auch so gar die Eichen
Und Reben werden grün !
O Herz, das sei dein Zeichen,
Werde froh und kühn !
その上，オークの木やブドウも
あおあおと色づき始めている！
ああ，心よ，春に応えて
楽しく，生き生きとしてちょうだいね！

J. ダヴェリオによれば，ファラースレーベンの詩における「春」とは，抑圧的な政体を打倒し，新しい共和主義的秩序の興隆を示す隠喩となっていると述べている[26]。この隠喩がシューマンの創作動機に少なからず影響を与えたとことは，次のクララの記述からも明らかである。「私が不思議に思うのは，外の世界で起きている恐ろしい出来事が，私の夫にあっては，正反対の内的な詩的情緒を呼び起こすのだということです。これらの歌の上には，最も気高い平和の香気が漂っています。花のように笑いさざめくこれらの歌は，私には春の前触れのように思えます。」[27] とある。

このような視点からこのアルバムに収められた一連の詩を眺めてみると，春に関係した詩がきわめて多く採用されていることに気付く。タイトルには春が記されていなくても，文中でそれを予示させる詩[28] を含めると，全29曲中9曲にものぼる。具体的に曲名を挙げれば，〈春の便り〉，〈春の挨拶〉，〈5月の歌〉，〈春の歌〉，〈春の訪れ〉，〈そう，春なのだ〉，〈戸外へ〉，〈みなしご〉，〈まつゆき草〉である。

シューマンの期待に反して革命の結末は，ブルジョア的自由主義と革新的民主主義が対立しながら君主制を擁護し，貴族や地主層に妥協した大ブルジョアジーが政治の実権を握る結果となった。当時の悲惨な状況について，クララは日記の中で率直に心中を書き綴っている。「すべての人が同等の人権を持つことに，最終的にどれほど時間がかかるのか。貴族たちは中産階級の人間とは身分が違うという根深い信念をいつまで持ち続けるのか。」さらにクララは「全ての歌は呼吸し，理想的な曲の精神である。それらは私に春のように，そして花が咲くように微笑みかけるように思われる。」[29] と続けている。

これらを踏まえるならば，《子どものための歌のアルバム》Op.79は，春を待ちわび，自由を待ち望んだシューマンが，将来を担う子ども達に託して自らの理想を間接的に伝えるための隠れ蓑であったと理解される。

その他の詩人はどうであろうか。哲学者でもあり，文学歴史学者でもあった詩人ウーラント

L. Uhland（1787－1862）は政治的活動のために大学でのドイツ文学の教授の座を退き，フランクフルト会議のメンバーとなった。ただし，シューマンが選んだ〈少年の山の歌 Das Knaben Berglied〉では，血気盛んな山の上の羊飼いの少年が描かれている。同じく1848年の革命詩人の一人であったガイベル E. Geibel（1815－1884）の詩も政治的なものではなく，２曲ともジプシー（スペイン）の歌を翻訳したものである。

オーヴァーベック C. A. Overbeck（1755－1821）の詩集《フレッツヒェンの歌》から「子どもが五月に遊ぶ Komm, lieber Mai, und mache」という詩に，シューマンは〈五月の歌 Mailied〉のタイトルを付して作曲した。同じ詩に A. モーツァルトが作曲した子ども用の歌曲〈春へのあこがれ Sehnsucht nach dem Frühling〉KV.596[30] は有名である。1844年に《子どもたちの十字軍》, 1846年に《子どもの歌》を発表したクレトケ H. Kletke（1813－1886）の〈眠りの精 Der Sandmann〉，そしてシューマンの唯一のオペラ《ゲノフェーファ Genoveva》Op.81の台本を書いた劇作家ヘッベル F. Hebbel（1813－1863）の〈幸福 Das Glück〉，デンマークの代表的な童話作家で詩人でもあるアンデルセン H. C. Andersen（1805－1875）の〈クリスマスの歌 Weihnachtlied〉，そのほかドイツ古典主義の代表的詩人ゲーテ Goethe（1749－1832），シラー Schiller（1759－1805），メーリケ Mörike（1804－1875），リュッケルト Rückert（1788－1866）の詩が使われている。

そして，アルニム Achim von Arnim（1781－1831）とブレンターノ C. M. Brentano（1778－1842）がドイツ民謡を収集して作成した《少年の魔法の角笛 Des Knaben Wunderhorn》の民謡集からは，〈ふくろう Kauzlein〉〈てんとう虫 Marienwurmchen〉〈つばめ Die Schwalben〉の３編が採用されている。

Ⅳ　シューマンの《子どものための歌のアルバム》Op.79の音楽的分析

１．調，楽想表示，拍子

全29曲から成るこのアルバムは，長調の曲が22曲でその大部分を占め，短調は全体の約３分の１にあたる７曲である。〈表４〉に見るように，最初の６曲は５度圏による調の設定によって音楽的な繋がりを強固にしている。第１曲はイ長調で始まり，第２曲はイ長調の下属調であるニ長調，続いてその下属調のト長調，ハ長調，ヘ長調と下属調によって，調関係は５度圏が明確である。その他の作品においてもハ長調を中心とした関係調の中に巧みに配置されている。ハ長調の歌曲は５曲あり，その属調（ト長調）と下属調（ヘ長調）が５曲ずつバランスよく配置されている。さらにハ長調の属調の属調（二長調），同じく下属調の下属調（変ロ長調）が各２曲，さらにそれらの属調（イ長調）が２曲と下属調（変ホ長調）が１曲使われている。短調はハ長調の平行調（イ短調）が５曲，変ロ長調の平行調（ト短調）が２曲で，いずれも〈ジプシーの歌〉〈ふくろう〉〈眠りの精〉〈みなしご〉のような暗いイメージに採用されている。曲集の最後の〈ミニョン〉もト短調で締めくくられるが，このゲーテの詩には革命騒ぎとは遠く離れた夢の世界，オレンジが実りレモンが花咲く理想郷への誘いが歌われている。

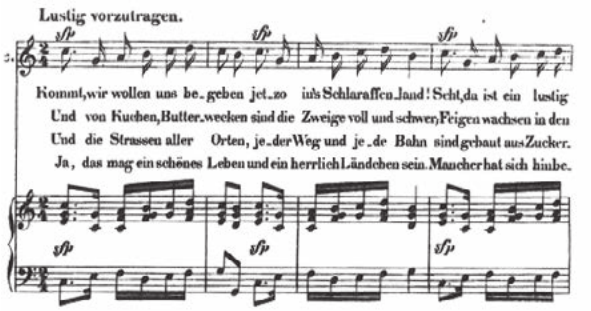
楽想表示に関しては，《子どものためのアルバム》Op.68ほどに多様ではない。Op.79の29曲中「Langsam ゆっくり」という表記が６曲，「Nicht Schnell 速すぎず」が７曲，反対に「Schnell 速く」,「Sehr Schnell とても速く」は合わせて４曲で，いずれもテンポに関する標記である。シューマンは詩のアクセントや音韻を味わいながら歌えるよう，テンポにも配慮していることが理解される。

拍子については，２/４拍子が29曲中13曲を占めている。２/４拍子については，《子どものためのアルバム》Op.68でも高い使用率であったが，ここにはシューマンの子どもへの配慮を読みとることができる。音楽教育書の中にシューマンの『音楽にかかわる家庭と生活の規範 Musikalische Haus－und Lebensregeln』[31]（以下，『教育的提言集』）を引用しているハンガリーの作曲家コダーイ（1882－1967）は，子どもの歩調と２/４拍子について次のように述べている。「子どもの持つ基本的形式は，２小節１組にある。これは子どもたちの両足がそれぞれ２度ずつ地に触れる時間的長さであり，楽譜で想像するなら，２/４拍子は２小節，強弱の繰り返しの２度である。」[32] 小さな子どもを対象とした曲集の前半に２/４拍子を集中的に使用していることも，シューマンの拍子へのこだわりと解釈したい。そのほか，３/８拍子は５曲，４/４と３/４拍子は各４曲ずつ，６/８拍子は２曲，２/２拍子は１曲となっている。

2．音域と旋律の特徴

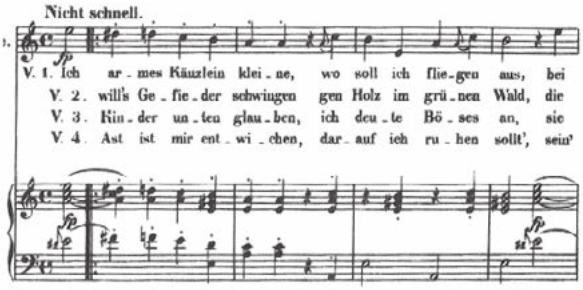
第１曲から第８曲までの歌の音域はオクターヴ内に留まっている。第９曲では一点ハ音～二点ト音の音域へと拡大し，10度の跳躍も現れる。「簡単な歌から難しい歌へ」の境界をシューマンは記していないが，簡単な歌と捉えられる歌曲は第８曲あたりまでと考えられる。また，シューマンは『教育的提言集』の中で，音の重なりに耳を傾けることの重要性を挙げているが，Op.79の中に重唱が合計６曲含まれており，４曲は２声で，２曲は３声で書かれている。また最初の２曲は四分音符，付点四分音符，八分音符を中心に動くが，第３曲〈春の便り〉では初めて十六分音符が現れる。また，スタッカートと対照的なレガートによる３連音符がクレッシェンドを伴って表情のある旋律となっている。順次進行と跳躍については和音の分散である３度の進行が中心である。さらに第４曲〈春の挨拶〉で付点八分音符が現れる。属七和音の分散である３度の跳躍とディクレッシェンドによるオクターヴの跳躍が加わり，味わいのある旋律となっている。第５曲〈怠け者の国〉は，２拍子でありながら冒頭は３拍子のようなフレーズを持つ旋律で現れる。（〈譜例１〉参照）

第５曲〈怠け者の国〉冒頭　〈譜例１〉



この曲に現れる「sfp スフォルツァンドピアノ」の位置は意図的に３拍子の感覚を与え，７小節目で２拍子の感覚を取り戻す，変拍子のような面白さを含んだ旋律である。詩の内容は，お菓子の国で過ごす風景が表されており，お菓子を熱望する子どもの様子が１小節半のフレーズに現れる。曲の後半に現れる繰り返された５度の跳躍は，詩のアクセントに合わせた子どもの無邪気さと表現を歌によって導く。最初に収められたファラースレーベンの詩による６曲は，和声的な発展を見せる〈日曜日〉で穏やかに締めくくられる。順次進行は少なく，４度，６度，３度，５度の跳躍が多い。また，付点二分音符の音にクレッシェンド，ディクレッシェンドの記号が付いており，長い音符に表情を付ける音楽的表現が加えられ，わずかながらポリリズムが見られる。第11曲〈ふくろう〉の音域は一点二音～二点ホ音となっており，旋律にはスタッカートによる連続した半音階を使用している。ふくろうの鳴き声を思わせる旋律とピアノ伴奏による和音進行の効果によって一層イメージが膨らむ。（〈譜例２〉参照）

第11曲〈ふくろう〉冒頭　〈譜例２〉



《子どものためのアルバム》Op.68で頻繁に表れた「Innig 心からの」の楽想表示は，第24曲目〈そう，春なのだ〉で初めて現れる。音域は一点ホ音～二点イ音と前半に比べるとかなり広くなっており，５度の跳躍から始まる旋律は５度の属七の和音によるピアノ伴奏とともに冒険心と驚きに満ちた，少々落ち着かない和音進行となっている。「そう」の歌詞ではこの曲集の中での最高音二点イ音に達し，シューマンの心情も最高潮に達する。この曲では「Etwas zurückhalten, im Tempo テンポを少し抑え気味」，「Schneller より速く」，そしてスタッカート，上行の音型へのクレッシェンド，下行の音型によるディクレッシェンド，ピアノからフォルテへの強弱の変化，フェルマータなど，緻密な音楽表現上の指示が多く現れる。心から春を待ちわびるシューマンの気持ちを代弁するような起伏のある作品となっている。曲集最後の〈ミニョン〉の音域は一点嬰ヘ音～二点イ音である。この曲でも二点イ音が現れ，高音に向けてクレッシェンドが連続して現れる。

3．旋律とピアノ伴奏

《子どものための歌のアルバム》Op.79に続くシューマンの歌曲集《ヴィルヘルム・マイスター Gesänge Aus Wilhelm Meister》Op.98a（1849）に収められた９曲には，ピアノ伴奏の中に歌の旋律を含むものは見当たらないが，

《子どものための歌のアルバム》Op.79の29曲中17曲は，ピアノ伴奏に歌の旋律を含んでいる。特に最初の６曲は歌の旋律をなぞるようなピアノ伴奏となっている。その他の伴奏は和音の中に旋律を含むなど，最初の６曲の伴奏と比較すると，明確ではないが明らかに歌の旋律音がピアノ伴奏に含まれる。29曲中５曲は，ところどころピアノ伴奏に歌の旋律を含むものとなっている。一方，曲集の約４分の１にあたる７曲は完全に独立したピアノ伴奏となっており，本来のシューマンの歌曲のピアノ伴奏の形を見ることができる。これらの曲集の傾向から見ても，正しい音程で歌うことができるよう，ピアノ伴奏によってサポートしようとしたシューマンの意図を読み取ることができる。『音楽と音楽家 Gesammelte Schriften über Musik und Musiker』の中でシューマン自身が「詩の思想をその中の言葉に遡って再現できるまで理解しようという努力を，詩が，ただ音楽の横を流れているに過ぎなかった昔の投げやりな取扱いとくらべるなり，よちよちとだらしのないありきたりの伴奏の形と比べるなり，してみたまえ。」[33] と，歌曲創作における詩とピアノ伴奏の重視性に言及している。

４．歌曲における詩と旋律の構成

〈表４〉で見るように，詩はほとんど全てが同じ旋律を何度か異なる歌詞で繰り返す形の有節形式で，１節の歌詞の長さは４行から９・10行にまで及んでいる。中には僅かながらも旋律やピアノ伴奏が異なるため反復記号で記されていない歌曲もある。また，複数の節の間に短く異なったピアノ伴奏が挿入される場合もあるが，基本的に同じ旋律を反復する有節形式の域を出るものではない。

そのような視点から，この曲集の全29曲を大別すると，次のように大きく３つのタイプになる。

① 単純な有節歌曲で異なる歌詞を同型の旋律で繰り返す。(a－a－a)

② 楽譜上では反復記号はないが，同型の旋律，もしくは僅かに変化した旋律を繰り返す。新たなピアノの間奏が挿入されることもある。(a－a'－a"）など。

③ 旋律や伴奏に一部変化を伴いながら各節を繰り返す。伴奏も異なる場合がある。転調が著しく通作歌曲に近いが，基本的に最初（第１節）の旋律と関連するパターンの反復である。(a－a'－b－a－c－a）など。

３つのタイプの割合は，①が55％，②が31％，③が14％で，①の占める割合は半数以上と極めて高い。小節数も①は比較的小規模で，②や③になると比較的大規模な曲が現れる。曲集最後の〈ミニョン〉は全体で最も長く，81小節にわたっている。次に，〈表３－１～３〉に示したタイムラインに基づきながら，それぞれのパターンの代表例を説明する。

①のタイプから第３曲〈春の便り〉

ファラースレーベンの詩による３曲目で，詩は４行３節から成っている。カッコウが「春よ来い」と鳴くと，春が野原へも牧場へもやってくるという内容で，春を待ち望む心情がカッコウに託して歌われている。ト長調，２/４拍子。「元気よく Munter」という楽想表示がある。12小節の基本旋律（a）がそのまま３回反復して歌われる。各節の始まりのカッコウの鳴き声は軽快なスタッカートで歌われるが，春を待ちわびる気持ちがゆったりとした３連符で現れ好対照をなしている。この詩のキーワードである「春 Frühling」の箇所は間奏に誘われるように長めの４分音符で弱く歌われる。続けて最後の４小節で嬰ヘ音から３度の分散的進行を伴なって曲中の最高音（ト音）に達したところで再び喜びに満ちた「春」が今度はフォルテで歌われる。

②のタイプから第14曲〈てんとう虫〉

ドイツ民謡集『少年の魔法の角笛』から採られた詩で，６行３節から成っている。詩には，てんとう虫に語りかける子どもの優しい気持ちが歌われている。ヘ長調，２/４拍子。楽想表示は「Nichit schnell 速くなく」。基本的に①のタイプと同じく15小節からなる基本旋律（a）が繰り返して３回，２小節の間奏を挟んで歌われるが，言葉のリズムに合わせて微妙に旋律が異なったり休符が挿入されたりする。その変化は微々たるもので，①のタイプと同じ有節歌曲の範疇にある。ピアノ伴奏も大きな変化は見られない。

③のタイプから第18曲〈歩きまわる鐘〉

ゲーテによる詩で，４行７節から成っている。教会の礼拝に行きたがらない子に，「鐘がやってきておまえをつれていく」と母親が語った言葉に恐怖を感じ，悪夢の中で鐘に追いかけられた挙句に自ずと教会へ足が向かうようになったというストーリーを持つ。

曲はト短調，2／2拍子。「語りかけるように」という楽想標示が付いている。鐘を連想させる不気味な強弱を伴う2小節の前奏に続けて，8小節からなる主要旋律（a）が弱拍から始まる。少年の気楽さを表現するところでは長調になり，不安が増してくると短調へ微妙に転調する。これが3回繰り返された後，少年が鐘に訴えかける箇所で新しい旋律（b）が4小節挿入される。それは再び主要旋律の変化形（a'）に受け継がれる。少年が逃げ回るドラマチックな箇所では新たな（c）が4小節現れ，再び（a'）の4小節，（a）の8小節が現れる。そして最後に（a）の音型を模した（d）の変化形で締めくくる。最後の4小節の後奏では前奏の強弱（フォルテとピアノ）は単なるアクセント表示に弱められているが，冒頭の鐘を連想させながら終わる。

詩がドラマチックに展開する中で，3回類似の旋律が繰り返される。言葉との関係で一部リズムが異なったり，新たな旋律素材が導入されたりするのは通作歌曲のレヴェルに近いが，旋律的にもリズム的にも基本旋律（a）と強く結びついており，詩と旋律とピアノ伴奏が相互に緊密に結び付いて高い芸術性を生み出している。

V　総合的考察―《子どものための作品》Op.79に見る「子ども観」

1　シューマンの教育理念と Op.79

1848年，この《子どものための歌のアルバム》Op.79に先立って出版されたピアノ曲集《子どものためのアルバム》Op.68は，家庭音楽ブームの中1851年には再版が出されるが，その際『教育的提言集』が付加された。シューマンが重要と考えた音楽的・教育的提言を断片的に列挙したもので，シューマンの音楽教育観を知るには格好の資料である。この内容は，当時のドイツの評論誌『新音楽時報 Neue Zeitschrift für Musik』に自ら投稿したもので，必ずしも系統的に整理されたものではないが，私的な教訓というよりは，一般の音楽学習者に語りかけた言葉となっている。《子どものためのアルバム》Op.68では，『教育的提言集』の中にシューマンの音楽教育観を多々見出すことができたように，1年後の「子どものための」歌曲集でも少なからず反映されていると想像しても不思議ではあるまい。

シューマンは《子どものためのアルバム》Op.68で日常生活の中での音を発する源，つまり発音体へ耳を傾けることの重要性を挙げたが，《子どものための歌のアルバム》Op.79では人間の発する声に目を向けさせる。そして声が生み出す「歌」を，人間にとって最も大切な音楽の根源として位置付けている。この点は，「お母さん，子どもにごく小さいうちから歌に対して目を開かせるようにしなさい。」[34] と呼びかけるフレーベルの理念と一致している。ちなみにフレーベルは，5年ほど前に R. コールに作曲を依頼して《母の歌愛撫の歌》を出版したばかりであった。《子どものためのアルバム》Op.68ではピアノ曲ながら〈○○の歌〉というように，「歌」が意識された楽曲のタイトルが曲集全体の1／3を占めていたが，《子どものための歌のアルバム》Op.79では文字通り歌詞を伴った歌の実践編となっている。

さらに『教育的提言集』では，「人間の声の4つの声種について早い時期から精通しなさい。とりわけ合唱に耳を傾けなさい。そして，どの音程に最も力点が置かれるのか，またほかのどのような音程の場合にそれが柔和で優しいものになるか探求しなさい。」[35] と述べている。それを裏付けるように4曲は2声で書かれ，2曲は3声で書かれている。当時一般家庭にまで広まった「家庭音楽」の中では，歌う側と聴く側の区別は厳格ではなく，聴き手は常に歌い手であり，その逆もあり得たことを考慮するならば，このような多様なスタイルに即応し得る曲集は極めて貴重であり，同時に音楽教育的効果をもたらすものでもあったと考えられる。この小さなアンサンブルは，子ども仲間による組み合わせも当然あり得るが，教養を持つ大人とのアンサンブルはより質の高い家庭音楽の場を提供する。それにピアノ伴奏を伴なえば，子どものように歌う大人と大人のように歌う子どもの相乗効果が期待される。

2　自然への志向

《子どものためのアルバム》Op.68では，春夏秋冬を題材としたタイトルが多くつけられ，自然への関心の高さが際立っていた。この点は《子どものための歌のアルバム》Op.79でも全く同様で，シューマンが考える子どもの世界を表現するための重要な創作動機となっている。

ただし，この曲集では，タイトルのみならず具体的な言葉を用いて希望に満ちた子どもの世

界が生き生きと詩の中に描かれており，いっそう子ども達にイメージし易い存在となっている。生活や自然に密着した題材の設定は，フレーベルの《母の歌愛撫の歌》との共通点でもある。さらにシューマンのこの曲集の表紙には，《子どものためのアルバム》Op.68と同じくリヒターによって描かれた挿絵が見られる。歌曲集を広げて歌う数人の少女の周りには草木が茂り，蜜蜂が飛びかい，小鳥が巣を温めている情景は，まさにフレーベルの挿絵をイメージさせる。

3　難易度への教育的配慮

1848年に完成した43曲からなる曲集《子どものためのアルバム》Op.68，その翌年作られた29曲を含む《子どものための歌のアルバム》Op.79は，いずれも小さな子どもから大きな子どもへとシューマンが難易度を配慮した子どものための曲集である。Op.68では，「小さな子どものため」と「大きな子どものため」の範囲は明確に区切られていたが，Op.79では特別な指定はない。しかし，冒頭にはファラースレーベンの詩による有節歌曲が５曲並べられ，〈表４〉に見るように，小節数も20小節以内ときわめて短い（タイプ①）。音域も一点ニ音から二点ト音に至る11度内に収まっており，旋律進行も順次進行が多く無理な跳躍はほとんど見られない。調の設定も近親関係調の域を出るものはなく，ピアノ伴奏に歌の旋律を含む歌曲は，歌いやすい曲と位置付けられる。

やがて旋律の反復は，第６曲以降，言葉のアクセントや抑揚に合わせて微妙な変化を伴うようになり，②のタイプの形式が現れる。②のタイプは基本的に①のタイプの旋律に基づいているので，難易度にはそれほど変化はみられないが，伴奏パートは必ずしも正確な歌の旋律を含むものではない。しばらくタイプ①と②は交互に現れるが，16曲目の〈幸福〉で新しく③のパターンが登場する。このパターンでは新たに発展的な旋律が挿入されたり，伴奏部分が独自の動きをする中で頻繁な転調を伴うのが特色で，基本旋律の反復から大きく離れるものではないが，子どもの歌の領域を超えて芸術歌曲の領域に接近してくる。音域も高音が二点イに達するものも現れる。２声，３声の歌曲は第10曲からおよそ５曲毎に現れるが，第16曲〈幸福〉の前半は異なる歌詞を掛け合いで歌う形をとっており，少人数でも仲間と容易に歌う喜びを味わう事が出来る。

また，この曲集全体を通して見られる特徴は，歌詞がシラビックに扱われ，話し言葉に近いことである。シューマンは意味が伝わりにくいメリスマ的な節回しを意図的に避け，子どもの話し言葉に近いレヴェルで歌うことができるよう明らかに配慮している。

しかし，曲集の表現上の難易度はさらに曲集の終わりに向かって高まっており，明らかに感情の成熟した裏付けが求められる。最後の〈ミニョン〉はあらゆる面でかなり高度のテクニックが要求されるもので，もはや子どもの世界の範疇を超えていると言ってもよい。

おわりに

《子どものための歌のアルバム》Op.79のシューマンの創作意図については，前項の総合的考察で論じたような視点から見る限り，特に音楽面で「子ども」を前提とした配慮を見出すことができた。詩の選択に関しては，子どもに相応しいタイトルの詩が採用されているものの，その背後には当時のドレスデンの過酷な状況下にあったシューマン自身の意図的姿勢が隠されていることは否定できない。Op.79がOp.68と同様に子どものための作品として優れていることに加え，フィンソンはシューマンの歌曲史の展望から，単に子どもの世界へと退行したのではなく，子ども達に歌曲を通して効果的にメッセージを伝えようとした巧みな創作技術を評価している。

シューマンは〈ミニョン〉というタイトルを好んで使用した[36]。初めて出現するのはピアノ曲のタイトルで，《子どものためのアルバム》Op.68の中に現れる。この歌曲集では曲集の最後に置かれているが，同年に作曲された作品98《ヴィルヘルム・マイスターの修業時代》（1849）の第１曲〈君よ知るや南の国（ミニョン）Kennst du das Land〉として再び登場する。ここでは《子どものための歌のアルバム》Op.79のバージョンに全く手は加えられてはいない。春を待ちわびるシューマンの夢は，子ども達に自然の中に生きる自由のすばらしさを伝えることであったことは容易に想像できる。さらに，南国の理想郷はその終わりであると共に出発点でもあり，《子どものための歌のアルバム》Op.79の〈ミニョン〉はそのターニングポイントとして位置づけることができる。

注および主要参考文献

1）西原稔『シューマン―全ピアノ作品の研究―　下』音楽之友社，2013，p.164
2）多田愉可・原田宏司『シューマンの「子どものためのピアノ作品」に関する研究』―《子どものためのアルバム》Op.68に見る「子ども観」とその背景―広島文化学園大学学芸学部紀要第８号，2018，pp.11-25
3）J. Finson, “Schumann’s Mature Style and the Album of Songs for the Young”, The Journal of musicology, Vol.1, no.1, 1982, pp.227-
4）J. Finson，前掲書 pp.227-250
5）P.Ostwald, “Schumann The Inner Voices of a Musical Genius”, Northeastern University Press, 1985, p.156
6）R. シューマン（吉田秀和訳）『音楽と音楽家』岩波文庫，1958，p.216
7）R. シューマン（吉田秀和訳），前掲書，p.216
8）E. Sams, “The Songs of Robert Schumann” Kindle No. 6432, Faber & Faber. Kindle 版
9）J. Finson，前掲書，p.228
10）W. ザルメン「〈家庭音楽〉と室内楽」家庭内の音楽―1600年から1900年まで，その社会的発展」H. Besseler & W. Bachmann 編『人間と音楽の歴史』第Ⅳシリーズ：1600年から現代まで，第３巻，音楽之友社，1985，p.31
11）W. ザルメン，前掲書，p.33，34
12）W. ザルメン，前掲書，p.33，34
13）W. ザルメン，前掲書，p.33，34
14）小笠原道雄『フレーベル』清水書院，2000，pp.225-241
15）原田光子『真実なる女性　クララ シューマン』ダヴィッド社，1970，p.154
16）R. Schumann, “Haushaltbücher 1837-1856” Band Ⅲ, Teil Ⅱ, Veb Deutscher Verlag für Musik, Leipzig, 1982, pp.489-492, p.495
17）E. Sams，前掲書，Kindle No. 4523-4526, Faber & Faber. Kindle 版.
18）A. Gebhardt, “Robert Schumann: Lebens und Werk in Dresden”, Tectum Verlag Marburg, 1998, p.71
19）J. Finson，前掲書，p.230
20）U. Mahlert, “Nachwort” in “Robert Schumann, Lieder-Album für die Jugend, Op.79” Urtext, Breitkopf & Härtel・Wiesbaden, 1991
21）U. Mahlert，前掲書，“Nachwort”
22）J. Finson, “Robert Schumann The Book of Songs”, Harvard University Press, 2007, p.161
23）R. Ringer, “Beyond the Year of Song Text and Music in the Song cycle of Robert Schumann After 1948”, Doctor of Philosophy, Dissertation, University of North Texas 2007, p.35
24）J. Daverio,（安部美香子訳）『シューマン：子供のための歌のアルバム』BMG ジャパン（1995録音 CD）曲目解説より，1998
25）J. Daverio,（安部美香子訳），前掲書
26）J. Daverio,（安部美香子訳），前掲書
27）B. Litzmann, “Clara Schumann: An Artist’s Life Based on Material Found in Diaries and Letters－Vol I: 1”, Read Books Ltd, Kindle 版, p.454
28）タイトルに「春」を含んではいないが，詩の中に「春」を含む作品として，〈戸外へ〉では「春が呼んでいる」，〈みなしご〉では「春がまためぐってきて」，〈まつゆき草〉では「春が時を告げている」のように詩の中に「春 Frühling」が現れる。
29）J. Finson，前掲書，p.228
30）ドイツ歌曲名歌集Ⅰ（最新・世界名歌曲選集），音楽之友社，2003，p.8
31）R. Schumann, “Musikalische Haus- und Lebensregeln Album für die Jugend”,（M. Kube/H. Kann 校訂）Wiener Urtext Edition, 2013ロバート・シューマン《子どものためのアルバム》Op.68，ウィーン原典版，音楽之友社，2015，p.79
32）ゾルターン・コダーイ（中川弘一郎編・訳）『コダーイ・ゾルターンの教育思想と実践――生きた音楽の共有をめざして』全音楽譜出版社，1980，p.2
33）R. シューマン（吉田秀和訳），前掲書，p.216
34）小原國芳／荘司雅子監修『フレーベル全集』第５巻，《母の歌と愛撫の歌》，「指ピアノ」玉川大学出版部，1981，p.112
35）R. Schumann, “Musikalische Haus- und Lebensregeln Album für die Jugend”，前掲書
36）D. Xu, “Themes of Childhood: A Study of Robert Schumann’s Piano Music for Children.” M. A. D. *Dissertation. University of Cincinnati*, 1999. (Xerox Copy. Ann Arbor, University Microfilkms)
p.32

ミニョンは芸人一座で，不安定な細い縄のダンスによって魅惑する子どもの美と曲芸師として描かれている。シューマンはもともとスケッチブックに「細い縄で踊る少女」のタイトルを考えていたが，後にミニオンと変更した。〈ミニョン〉のタイトルで作曲したベートーヴェンが《6つの歌曲》(Op.75-1) として作品を残している他，シューベルト，リスト等も傑作を残している。

37) ヤン・ラルー　大宮眞琴　共著『スタイル・アナリシス』音楽之友社，1998，pp.75-98

〈参照楽譜〉

1) Robert Schumann, *Lieder-Album für die Jugend*, Op.79, Urtext, Breitkopf & Härtel・Wiesbaden, 1991

〈表３－１タイムライン[37)]〉①有節歌曲　第３曲〈春の便り〉

Munter

旋律	a(12)										
	2						間奏				
	4				5					10		12
調	G										
歌詞	Kuckuck, Kuckuck	ruft aus dem Wald	Lasset uns singen	Lasset uns springen!	Lasset uns singen und	springrn!		Frühling	wird es nun	bald	Frühling wird es nun	bald

〈表３－２タイムライン〉②反復記号を使わないで繰り返すタイプ　第14曲〈てんとう虫〉

Nicht Schnell

旋律		a(15)									
		2									
		4				5					10
調		F									
歌詞	Ma	rienwürmchen	setze dich auf	meine Hand, auf	meine Hand, ich	tu' dir nichts zu	Leide	nichts	nichts zu	Leide.Es	soll dir nichts zu

a										
				間奏			a'(15)			
				15					20	
leid geschehn	Will nur deine bunte	Flügel sehn	Bunte Flügel meine	Freude		Ma	rienwürmchen	fliege weg, Dein	Häuschen brennt, die	

a'										
				25					30	
				g						
Kinder schrein so	sehre, wie so	sehre.	schrein	schrein so	sehre, Die	böse Spinne	spinnt sie ein,	Marienwürmchen,	Deine Kinder schreien	

a'				a"(15)						
	間奏									
				35					40	
Deine Kinder schreien	sehre		Ma	rienwürmchen,	fliege hin zu	Nachbars Kind, zu	Nachbars Kind, zu	tun dir nichts zu	Leide	

a"										
								後奏		
				45					50	51
nichts	nichts zu	leide Es	soll dir da kein	Leid geschehn　Sie	wollen deine bunten	Flügel sehn	Und grüß sie alle	beide		

〈表３－３タイムライン〉③変化を伴ないながら繰り返すタイプ　第18曲〈歩きまわる鐘〉

Im erzahlenden Ton

旋律			a(8)							
	2 前奏									
	2				5					10
調	g					→	B			→
歌詞		Es	war ein Kind, das	wollte nie zur	Kirche sich be	quemen und	sonntags fand es	stets ein Wie Den	Weg ins Feld zu	nehmen. Die

a(8)								a	
				nach und nach stärker					
				15					20
g			→	B			→	g	
Mutter sprach: die	Glocke tönt und	so ist dir's be	fohlen und	hast du dich nicht	hingewöhnt, sie	kommt und wird dich	holen. Das	Kind, es denkt; die	Glocke hängt Da

a(8)						b(4)			
		Immer stärker							
				25					30
	→	B							
droben auf dem	Stuhle.Schon	hat's den Weg ins	Feld gelenkt als	lief es aus der	Schule. Die	Glocke, Glocke	tönt nicht mehr, Die	Mutter hat ge	fackelt.Doch

a(4)				c(4)				a(4)	
				35					40
			d				a		
welch ein Schrecken	hinterher! Die	Glocke kommt ge	wackelt. Sie	wackelt schnell, man	glaubt es kaum;Das	arme Kind im	Schrecken,Es	läuft, es rennt, als	wie im Traum;die

a		a(8)							
				45					50
	→	g				B			
Glocke wird es	decken.Doch	nimmt es richtig	seinen Husch und	mit gewandter	Schnelle,es	eilt durch Anger,	Feld und Busch zur	Kirche und Ka	pelle Und

d(4)				coda(8)					
								後奏	
				55					60
		d		g					
jeden Sonn- und	Feiertag ge	denkt es an den	Schaden,Läßt	durch den ersten	Glockenschlag nicht	in Person sich	laden		

後奏	
	63

〈表４〉《子どものためのアルバム》Op.79の楽曲分析一覧表

	原語（訳：前田昭雄）	作詩者又は詩集	調性	アウフタクト	小節数	拍子	音域	音楽の形式	詩の形式	転調	声部	歌詞と旋律の関係	旋律と伴奏の関係	後奏間奏前奏	備考
1	Der Abendstern（宵の明星）	Fallersleben	A	○	8	2／4	fis^1-fis^2	①	4行4節			A	A		
2	Schumetterling（蝶々）		D	○	16	3／8	fis^1-g^2	①	4行4節			A	A	前・間	
3	Frühlingsbotschaft（春の便り）		G		12	2／4	fis^1-g^2	①	4行3節			A	A		
4	Frühlingsgruss（春の挨拶）		G	○	13	3／4	d^1-g^2	①	6行3節			A	A		
5	Vom Schlaraffenland（怠け者の国）		C		16	2／4	fis^1-f^2	①	8行4節			A	A		
6	Sonntag（日曜日）		F	○	46	3／4	f^1-f^2	②	4行4節			A	A	前・後	Haushaltbücher
7	Zwei Zigeunerliedchen（ジプシーの歌１）	Geibel『スペインの歌曲集』から	a		36	2／4	e^1-f^2	②	2行4節	a-(d)-a-(d)-a-(d)-a		A	B	間・後	Haushaltbücher
8	Zwei Zigeunerliedchen（ジプシーの歌２）		a	○	24	3／8	d^1-f^2	②	4行2節			A	A		
9	Des Knaben Berglied（少年の山の歌）	Uhland	C	○	17	3／4	c^1-g^2	①	6行4節	C-(a)-C		A	B	前・後	
10	Mailied（５月の歌）	Overbeck	G	○	39	3／8	e^1-g^2 h-e^2	①	8行2節	G-(C)-G	２声	A	A	後	
11	Käuzlein（ふくろう）	『少年の魔法の角笛』	a	○	19	4／4	d^1-e^2	①	7行4節	a-(C)-a		A	A	後	
12	Hinaus in's Freie（戸外へ）	Fallersleben	F	○	20	2／4	c^1-f^2	①				A	A	後	
13	Der Sandmann（眠りの精）	Kletke	a	○	41	2／4	e^1-f^2	①	10行2節	a-(C)-a		A	C	前･間･後	
14	Marienwurmchen（てんとう虫）	『少年の魔法の角笛』	F	○	51	2／4	f^1-f^2	②	6行3節			A	A	間・後	
15	Die Weise（みなしご）	Fallersleben	a	○	18	2／4	e^1-f^2	①	4行4節			A	A	後	
16	Das Glück（幸福）	Hebbel	D		75	3／8	d^1-g^2 cis^1-fis^2	③	4行7節		２声	A	B	後	
17	Weihnachtlied（クリスマスの歌）	Andersen	G	○	30	4／4	fis^1-g^2	②	7行2節	G-(a)-G-(a)-G	３声（最後３小節）	A	A		
18	Die wandelnde Glocke（歩きまわる鐘）	Goethe	g	○	62	2／2	d^1-f^2	③	4行7節	g-(B)-g-(B)-g-(B-d-a)-g-(B)-g		A	A	前・後	Haushaltbücher
19	Frühlingslied（春の歌）	Fallersleben	C	○	27	6／8	e^1-g^2 h-f^2	①	10行3節	a-C	２声	A	B	前・後	Haushaltbücher
20	Frühlings Ankunft（春の訪れ）	Fallersleben	G	○	31	2／4	e^1-e^2	②	4行3節			A	C	間・後	
21	Die schwalben（つばめ）	『少年の魔法の角笛』	C	○	19	2／4	c^1-f^2 b-d^2	①	4行3節	C-(a-F)-C	２声	A	C	後	
22	Kinderwacht（子供のおもり）	不明	F	○	13	2／4	c^1-c^2	①	4行2節			A	A	後	
23	Des Sennen Abschied（牛飼いの別れ）	Schiller	C	○	65	3／4	c^1-fis^2	③	4行3節	C-F-C-a-C		A'	C	前･間･後	Haushaltbücher
24	Er ist's（そう、春なのだ）	Mörike	A		40	2／4	e^1-a^2	③	9行	A-(E-D-C)-A		A'	C	前･間･後	
25	Spinnelied（紡ぎ歌）	不明	F		11	6／8	g^1-g^2 e^1-es^2 c^1-c^2	①	5行5節		３声	A' A' A'	C	間	
26	Des Buben Schützenlied（少年の狩人の歌）	Schiller『ヴィルヘルム・テル』より	B	○	24	4／4	es^1-g^2	②	4行3節	B-(c)-B-(c)-B		A'	A	前・間	Haushaltbücher
27	Schneeglockchen（まつゆき草）	Rückert	Es	○	25	2／4	d^1-g^2	②	12行			A	B	前	
28	Lied Lynceus des Thurmers（塔の番人リュンコイスの歌）	Goethe『ファウスト』より	B	○	21	4／4	d^1-g^2	①	8行2節			A'	A	後	Haushaltbücher
29	Mignon（ミニョン）	Goethe	g	○	81	3／8	fis^1-a^2	②	7行3節	g-(B-g-c)-G-g-(B-g-c)-G-g-(B-g-c)-G-g		A'	C	前･間･後	Haushaltbücher

邦訳…ニューグローヴ（藤本一子，前田昭雄）

最高音 a^2
最低音 b

①有節歌曲
②反復記号を使わないで，通しで繰り返すタイプ
③変化を伴ないながら繰り返すタイプ

A旋律を含む伴奏
B所々旋律を含む伴奏
C独立したピアノ伴奏

Haushaltbücher（シューマンの日記帳に記されている曲）